

生きる事の美しさ

シャンソン歌手 友納あけみ

次々に台風がやってきました。なんだか今年の夏は不安定！突然の豪雨も多くて！やはり地球のどこかで、何かが壊れ始めているのかもかもしれません！巡る四季の移ろいは日本の風土、人々の心文化、全ての大切な礎！当たり前のことが、当たり前前にある事が、今は一番、贅沢なことなのかもしれませんね！

暑い夏と負けない位に熱く燃えていたのがリオのオリンピック！毎晩の熱戦にすっかり寝不足でした。地球の裏側から、画面を通して、選手たちは色々なことを教えてくれました。

生きる事、命を与えられていることは、素晴らしいことなんだと改めて思いました。

そして、今年は何より感じたのが、お互いに信頼し合い、助け合い、競い合い、喜び合うことの素晴らしさだった気がします。

日本は体操、卓球、リレー、シンクロとチームで沢山のメダルを取ってくれました。柔道もレスリングもチームと言っているくらい、共に支え合った結果だと思えます。勝利の喜びを分かち合い、喜び合う選手たちの姿は、人がどう生きていけば、「幸せ」を感じられるのか：体現してくれました。

折から、三千本安打を成し遂げたイチロー選手が会見で、「自分がやっ

たことが、誰かの喜びに変わることが、今の自分にとつて、とても大切なこと何だと改めて思った」と語っておられました。

孤高の男と呼ばれ、故国を離れて一人外国でゴツゴツと己と戦って、今の地位と実力を勝ち得たイチロー選手でさえ：と思うと、「一人」という言葉通り、人間はやはり支え合って、分かち合っ生きていくように創られているのだと、確信させてくれます。そうしないと「幸せを感じられないのだと：私も少しでも皆様に喜びをお届けできるように、頑張ろう」と沢山のエネルギーと勇気をもたらした気分です。



高尾山の昆虫

ダイミョウセセリ

高尾の自然路を歩き、樅の林で写真撮っていますと、小型の可憐な蝶に出会いました。ミスジチョウの仲間かと思いきやシャッターを押し、後にセセリチョウの一種のダイミョウセセリであることに気がつきました。蝶と蛾の中間を思わせるセセリチョウは翅を閉じて止まる傾向が強く、本種の様に翅を開いて止まるのが常であるのは、チャマダラセセリ亜科に共通した特徴です。翅は黒褐色で前翅にはバランスのいい大小の白紋が入ります。



この白紋の入り方は地方変異があり、西日本に産する個体は前翅のみならず後翅にも白紋が明瞭に表れますが、東日本産は消失するか不明瞭であったり、痕跡程度になります。やや山地に多く見られ、幼虫の食草はヤマノイモ科の葉であることが知られています。気になるのはダイミョウセセリと付いた和名で、これは紋付き羽織袴で正装した大名のようないでたちを表現したとされますが、なんとも粋なネーミングですね。

蝶の和名の由来にはオオムラサキ、コムラサキ、スミナガシのように、優雅で風流なものが少なくなく命名のセンスを感じる次第です。大名の家紋を思わせる本種に高尾で出会うのも、また一興だと思えます。

(撮影・文 松島 孝)

おはなし散歩道

峠のおはぎ茶屋

湯沢町 富樫あい子

武州の峠に「おはぎ茶屋」がありました。

生き物が大好きなじいさんが田畑を耕し、米と小豆を作り、笑うことが大好きなばあさんが、おはぎを作って茶屋で売っていました。

秋も深まり、刈り入れの頃、イナゴが大発生しました。じいさんはワラを燃やして煙でイナゴ退治をしている時に、飛び火して実った稲と小豆を全部、燃やしてしまいました。

がつくりと肩を落として帰ってきたじいさんに、「ケガがなくて良かった。山の動物たちも無事か!」「ああ、みんな無事だ!」「それは良かったのお!」「ばあさんが喜びました。」「すまん。来年の米や小豆を買う銭がないのじや!」

詫びるじいさんに、「材料がなくなったら店じまいだ。休みは今までのごほうびだあハハハ」

ばあさんは明るく笑いました。

じいさんは、焼け残りの米や小豆を手に取り、「焦げ臭い米だが来年まで食いつなげるかいのお」眉を寄せています。

「はい、大丈夫ですよ」力強い、ばあさんの返事です。

いよいよ、茶屋を閉める日がきました。「これで、おはぎ作りは最後のお」

二人は米をとき、小豆をひと鍋煮て寝ました。次の朝、目を覚ましたばあさんはビックリです。小豆がふた鍋と米が二日分、といっていました。「これは上等な小豆だ!」

じいさんは、香りをかぎました。

「あれ、まあ。玄関に砂糖が……」

ばあさんが腰を抜かしました。

「おい、メシを炊くぞ!」

二人は早速おはぎを作り茶屋を開けました。

おはぎは、全部売り切れてしまいました。

「やれやれ、明日からは本当に閉店じゃのう!」

二人は、ぐっすり寝てしまいました。

次の日の朝。

「なんじゃ。これは……」

作りたてのおはぎが茶屋に届いていたのです。

ばあさんが一口食べると自分のおはぎより甘くておいしいのです。

「すぐに店を開けよう!」

じいさんが張り切ります。それから毎朝、茶屋におはぎが届きました。

不思議に思いながらも夜になると疲れてぐっすり寝てしまいました。

「いったい、だれが持ってくるのだろう!」



(さし絵・小出 茂)

まつて足の骨を折り、歩けないでいました。じいさんは家にサルを連れて帰り、足に添え木をして、しばらく茶屋で面倒見ました。足が治ると山に返してあげました。

「あのときのサルだのお!」「そうだ。あのサルの仲間たちじゃ!」

ほっこりと、うなずいていました。

今、武州峠に、じいさんばあさんと、サルがお給仕する茶屋があると、風の便りに聞きました。